

論 文 要 旨

氏 名 長友 隆志

論文題目（外国語の場合は、和訳を併記すること。）

日本人高校生のライティング方略・メタ認知・自己効力感を育成するための英作文の
指導と評価

論文要旨（別様に記載すること。）

- （注）
1. 論文要旨は、A4版とする。
 2. 和文の場合は、4000字から8000字程度、外国語の場合は、2000語から4000語程度とする。
 3. 「論文要旨」は、CD等の電子媒体（1枚）を併せて提出すること。
（氏名及びソフト名を記入したラベルを張付すること。）

本研究は、日本の高校における英作文についての効果的な指導方法をテーマとしている。管見では、日本の高校における英語教育現場では、英作文を指導する際、エラーの修正自体にフォーカスを当てる場面が多い。しかしながら、英作文能力の向上は、英語能力の変化に限らず、学習者の心理面や認知面においても成長の過程を経ていると考えられる。よって、本研究では、英作文能力そのものの変化だけではなく、その過程における自己効力感、メタ認知の変化に焦点を置き、それらの要因がどのようにライティング方略と結びついているかについて研究を行っていく。実践の際に、それらの要因を効果的に伸ばさせるための方策として、学習者が自らの英作文について振り返る学習ジャーナル、そして、それらを評価する教師のフィードバックを挙げ、効果的なフィードバックの仕方について、学習者のメタ認知、自己効力感、ライティング方略の変化の観点からの学習ジャーナルの分析等により明らかにする。自己効力感、ライティング方略についてはアンケート尺度を用いて量的分析を行い、メタ認知については、学習ジャーナルを用いて質的分析を行う。本研究では、これらの量的分析と質的分析を総合し、混合研究法を用いる。混合研究法のモデルである並行的トライアンギュレーションアプローチに沿って研究を行う。このモデルでは、1つの手法の短所を他方の手法が持つ長所で相殺する手段として、量的研究手法と質的研究手法を別々に用いる (Creswell, 2007, p. 243)。質的分析の中では、GTA(Grounded Theory Approach)を用いる。GTA はデータと向きあいながら分析を行い、仮説や理論モデルを構築する手法である。最終的に、どのようなフィードバックや評価が、学習者の英作文能力の向上に効果的であるか、教育学的視点から考察を述べる。また、本研究において、被験者はクラスター分析により 3 つのグループに分けられる。フィードバックが能力の異なる 3 つのグループにおいてどのような結果をもたらすかについて考察することも研究項目の一つである。以上のことを踏まえた上で、下記の 3 つのリサーチクエスションに基づいて本研究を行う。

1. 学習者の英作文について、教師からのフィードバックにより、学習者の自己効力感やメタ認知、そしてライティング方略はどのように変化するのか、またそれらがどのように関連し合っているのかを分析する。
2. 自己効力感やメタ認知を高め、そしてライティング方略の効果的使用を促すための励ましやエラーコードを用いたフィードバックが、効果があるかを分析する。
3. フィードバックの効果が生徒の能力（習熟度の高い学習者、習熟度が中位程度の学習者、習熟度が低いとされる学習者の 3 つのグループ）によって、どのように異なるかを、英作文における自己効力感、メタ認知、ライティング方略の観点から分析する。

本論文の構成は、第 1 章：事前調査、第 2 章：先行研究、第 3 章：章予備的研究、第 4 章：研究方法、第 5 章：分析結果と考察、第 6 章：考察、終章から成り立っている。

第 1 章では事前調査として、被験者がこれまで書いてきた英作文の内容とともに、どの

ようなライティング指導を受けてきたか等の基本的な英作文の経験について調査している。また、調査では、エッセイや要約等、どのような種類の英作文について書いたことがあるか、また、フィードバックを誰からどのように受け、どう感じたかについて質問を行っている。事前調査の結果、中学校時の英作文のアウトプット活動が乏しく、和文英訳が中心であったこと、何らかのフィードバックを受けたことのある生徒は全体の 56%であり、そのうちの半数は明示的修正（エラーに対し直接に修正の英文を書く）ものであったことが判った。また、フィードバックを活用する生徒は全体の半数以下であった。よって、英作文によるアウトプットの機会を設け、フィードバックにより英作文を改善していくことは有意義であり、本研究では、自己効力感、メタ認知、ライティング方略に焦点を置きながら、フィードバックの実践を行った。

第 2 章では、本研究におけるキーワードである、自己効力感、メタ認知、ライティング方略について先行研究をまとめている。Bandura (1977)によれば、自己効力感とは、「これならばここぐらいまでできるのではないか」という自分の課題の遂行に対する期待感を表すものである。英作文において高い自己効力感を持っているということは、英作文を学習していく上でモチベーションを向上させるための要因でもある。メタ認知とは Flavell (1987)や Brown (1987)らによって定義づけられ、発展をしてきた概念である。メタ認知とは高次的認知能力であり、“knowing about knowing”、つまり自分の認知に対する認知を示し、自分の学習プロセスを客観的にモニターする能力である。メタ認知が高まることで、学習者は自分のライティング方略や英作文の学習プロセスを客観的に分析することが可能であり、その scaffolding（足場かけ）となるのが、教師によるフィードバックである。よって、フィードバックの方法論やフィードバックの効果、さらに、学習ジャーナルによる生徒の振り返りや書き直しの効果についても先行研究を行い、本実践においてどのようなフィードバックを行っていくかについて議論を深めている。

先行研究では、量的分析と質的分析を統合しつつ分析を行う並行的トライアングレーションアプローチを用いた混合研究法、ケーススタディ、GTA 等の研究方法についてもレビューを行っている。量的分析で使用を検討する、自己効力感、ライティング方略についてのアンケート尺度については、先行研究を通して内容的妥当性の検証を行った。GTA は本研究において特徴的な研究方法であるが、構造構成主義や社会構成主義も理論の背景に加え、その妥当性を述べている。構造構成主義とは、関心相関性を核とする理論であり、実践研究者の考えや経験が GTA により分析する際の妥当性の担保につながるとしている。また、社会構成主義は、実践研究者と被験者の関係性を GTA を行う際に考慮することで妥当性を高めるものである。さらに、GTA による定性分析とテキストマイニングによる定量分析を組み合わせた GTMA (Grounded Text Mining Approach) (稲葉・抱井, 2011) を活用するとともに、構造構成主義と社会構成主義を効果的に分析の中で活かすことのできる戈木版 GTA(2005)を GTMA の中に組み込むことが効果的な手法として考えられるとした。また、実践方法の確立のために、学習ジャーナルやフィードバックについても先行研究を

行っている。先行研究を基に、実践方法や研究方法を更に検討していくこととした。また、実践後には、再コーディングやメンバーチェック、ピアディブリーフィングにより内的妥当性の検証を行い、さらに、外的妥当性として、厚い記述を行うことが求められるとした。

第3章の予備的研究では、本研究の実践を行う前に、量的研究で用いるアンケート尺度や実践で用いるフィードバック、そして、分析方法の適切性を総合的に検証している。量的分析は、自己効力感アンケート (Yavuz & İflazoğlu, 2011) とライティング方略を測るアンケート (久山, 2008) を取り入れて行った。いずれも EFL (外国語としての英語) 環境下での英作文指導で使用されたアンケートであり、ライティング方略のアンケートについては、本研究の被験者と同じ環境 (日本人高校2年生) において実践されたものである。自己効力感アンケートについては、Yavuz & İflazoğlu (2011) のアンケートを、日本人高校生へ適合するように、表現や文言を一部修正したものを用いた。また、質的調査としては、教師からのフィードバックや英作文の実践後、生徒の学習ジャーナルをケーススタディとして分析し、学習者のメタ認知の変化について考察を行った。この予備的研究の結果、フィードバックを通して、メタ認知が活性化することで、エラー修正が可能になり、エラーが修正されるプロセスの中で自己効力感やライティング方略が相互に作用し強化されながら、英作文能力を伸ばしていることが判った。この予備的研究を基に更に改善したものが本研究の実践である。予備的研究では、自己効力感、ライティング方略のアンケート尺度について、クロンバック α による信頼性の検証を行っている。また、予備的研究においても混合研究法により妥当性の確保を行っている。

第4章の研究方法では、事前調査、先行研究、予備的研究を経てどのような実践を行い、どのような方法でデータを収集・分析するかについて述べている。被験者は、習熟度別にクラスター分析により3つのグループに分けられる。グループ①は習熟度の高い学習者 (文法・語法は中程度で、表現力とライティング方略についての意識の両方が高い)、グループ②は習熟度が中位程度の学習者 (文法・語法が低く、表現力は中程度、ライティング方略について高い意識を持っている)、グループ③は習熟度の低い学習者 (文法・語法、表現力が低く、ライティング方略について高い意識を持っている) である。実践方法については全体の実践の流れを説明し、どのようなフィードバックをどのタイミングで行うかについて説明している。本研究のライティング活動の特徴は、フィードバックとして、エラーコードによる暗示的フィードバックとエラーを直接修正する明示的フィードバックを取り入れたことである。生徒は暗示的フィードバックにより、メタ認知を活性化させることで自らエラーを修正し、明示的フィードバックにより修正内容の妥当性を確認できる。確認することで、修正の活動プロセスを肯定的なものとし、自己効力感が高まることが期待できる。また、本研究の研究方法として、量的分析と質的分析を合わせた混合研究を取り入れている。量的分析では、アンケート尺度を用いて、学習者の自己効力感とライティング方略について分析を行う。また、ESL Composition Profile (Jacobs et al., 1981) を用いて (以下 ECP 評価)、英作文自体の評価の数値化を行う。これらの3つの数値に関して、

実践の事前と事後でどのような変化をもたらすかについて研究を行うものである。統計手法としては、ウイルコクソンの符号付順位和検定を用いることで、事前と事後の有意差を検定する。さらに、スピアマンの順位相関係数を統計手法とし、自己効力感、ライティング方略、ECP 評価の概念間の相関分析を行った。

質的調査では、GTMA (稲葉・抱井, 2011) とケーススタディとして、習熟度別の各グループから 1 名ずつ選び、学習ジャーナルの分析、そしてインタビューによる分析を行った。GTMA とはコンピュータを用いたテキストマイニングアプローチによる定量分析と、GTA を用いた定性分析の 2 つの観点からデータを分析するものであり、定量分析と定性分析を比較・統合することで、新たな理論モデルを模索するという分析方法である。また、GTA の方法論として戈木版 GTA を用いることが本研究の特徴である。戈木版 GTA は、コーディングの際に研究者が質的データに対し、現場の状況に合ったコーディングを行うことで、データに対し、柔軟にコーディングを行うことが可能である。また、プロパティ (現象の特性) やディメンション (現象の特性の程度) を用いることにより、現象に対し、正確なコーディング過程を持っている。戈木版 GTA の過程には構造構成主義や社会的構成主義の理論も適用させることができ、実践研究者の主観と被験者との社会的関係を鑑みながら、より妥当性のあるコーディングが可能である。ケーススタディでは各グループの生徒について、教師のコメントと生徒の学習ジャーナルを関連させながら分析を行った。また、インタビューにおいては、フィードバックによる自己効力感、メタ認知、ライティング方略の変化についてさらに分析を行った。分析終了後は、これらの分析結果について、再コーディング、メンバーチェック、ピアディブリーフィングによる内的妥当性の検証を行った。さらに、量的分析、質的分析の観点から、分析結果について厚い記述を行うことで、外的妥当性の担保を図った。

第 5 章では分析結果として、量的分析、質的分析の結果について述べ、分析結果に対する妥当性の検証を行っている。量的分析の結果は、事前と事後において自己効力感、ライティング方略、そして ECP 評価の結果が向上したということである。しかしながら、ECP 評価についてのみ、事前と事後で有意差を確認することができなかった。また、グループ毎の考察であるが、上位グループになるほど、自己効力感、ライティング方略、ECP 評価に強い相関が見られ、下位グループになると 3 つの項目について相関関係は見られるものの、結びつきが弱くなっていることが判った。能力が高いグループの生徒は、自己効力感、ライティング方略、ECP 評価を効果的に結び付け、活かすことができている、つまり、フィードバックを効果的に用いているといえる。

質的分析では、定量分析と定性分析を統合した GTMA、そしてケーススタディを行った。GTMA では、上記の量的分析の結果を裏付けるような結果が得られた。また、量的分析ではカバーできない、メタ認知についても GTMA を用いることで、厚い分析と結果の記述を行うことができた。定量分析では、コンピュータによるテキストマイニングを行うことで、多くの学習者のジャーナルデータから、自己効力感、メタ認知、ライティング方略につい

での記述を抽出し、分析を行った。定性分析ではGTAにより、コーディングを行い、学習者がどのように自己効力感、メタ認知、ライティング方略を改善しているかを視覚化し、分析を行うことができた。質的分析では、量的分析よりも、データに密着しながら、どのように自己効力感、メタ認知、ライティング方略が時系列で変化したかについて分析を行うことができた。質的分析の結果、被験者全体、各グループにおいて英作文へのフィードバックを通し、自己効力感、メタ認知、ライティング方略についての向上が見られた。ケーススタディでは、GTMAの分析内容をさらにサポートするために、能力別に各グループの生徒を1名ずつ選び、学習ジャーナルの分析、さらにインタビューを行った。

第5章の後半では、分析結果について妥当性の検証を行っている。本研究の妥当性は、内的妥当性や外的妥当性、そして構造構成主義や社会構成主義の理論を背景として、構成されている。内的妥当性とは分析データについての妥当性であり、データ解釈にどれだけの信憑性があるかを問うものである。内的妥当性を検証するために、本研究では、研究者自身が、分析が終了後、ある一定の時間を空け、再度、データの分析について確認を行うもの（再コーディング）、被験者に分析結果を見て、確認してもらうもの（メンバーチェック）、実践研究者以外に他の研究者から分析結果について検証（ピア・ディブリーフィング）を受けた。外的妥当性とは、得られた解釈や理解が他のコンテキストにどの程度転用可能であるかを示したものであり、本研究では、分析のプロセスと結果について厚い記述を行った。これらの3つの要素を三角測量とし、妥当性を強化させた。また、検証においては、構造構成主義と社会構成主義の原点に立ち返り、再度、分析結果の妥当性について検証を行った。GTAでは、再度分析データと向き合い、構造構成主義の関心相関性による分析を行いながら、分析内容が正しいかどうかの確認を行いながら、コーディングの確認を行った。また、分析の過程で、社会構成主義を意識し、実践研究者と被験者の関係にも配慮しながら、再度コーディングを行い更に妥当性を高めた。様々な観点から妥当性の確認を行うことで厚い分析が可能となり、外的妥当性も確保できていることを述べている。

第6章では本研究の考察として、リサーチクエスチョンとの関係における分析結果の考察、他の先行研究との比較を行った。

リサーチクエスチョン1については、教師による1回目のフィードバックではエラーコードを用いることによりメタ認知を活性化するきっかけとなっており、メタ認知が向上することで、学習者のライティング方略は改善されていた。メタ認知が高まることでライティング方略が活性化され、エラーに対する修正が行われ、学習者が自ら、自身の英作文について修正ができるようになることで、自己効力感が高まり、メタ認知が向上していた。また、修正について自信のない生徒については、2回目の明示的なフィードバックにより、英作文の改善を図ることができた。このようにフィードバックを通して、これらの要素が互いに関連しながら、振り返りなどのライティング方略を改善している事が判った。リサーチクエスチョン2については、エラーコードによる修正の後に明示的修正を与えることで、学習者は修正に自信を持ち、自己効力感を高めていた。また、励ましや賞賛のコメント

トにより自己効力感はさらに高まり、効果的なライティング方略の使用ができるようになった。最後にリサーチクエスチョン3についてであるが、習熟度の高い生徒は、自己効力感やメタ認知を向上させることで、英作文の修正点において自ら修正が可能であるが、習熟度の低いグループにおいては自己効力感やメタ認知は向上するものの、自らの能力で最後の修正まで行うだけの能力が備わっておらず、フィードバックを効果的に用いることができなことが判った。また、全学習者について、自己効力感やメタ認知が向上することで、英作文に取り組む際に、フィードバックを基に自分のエラーと忍耐強く向き合い、自ら修正できるという自己効力感が培われ、前向きに英作文に取り組み、効果的なライティング方略を使用している事が判った。

次に他の先行研究との比較であるが、本研究の分析結果と他の先行研究とを比較すると、類似点と相違点が見られた。比較対象として、久山 (2008) や Sasaki (2000;2002)等の研究との比較を行った。本研究においては、久山 (2008)の研究と同様に、フィードバックがライティング不安と関連しているという結果は得られなかったが、自己効力感が学習者の英語の習熟度に関わらず、事前と事後で前向きに変化していることが判ったことは、本研究による独自の成果である。Sasaki (2002)は、未熟な学習者の書く能力において流暢性は改善されなかったとしているが、本研究では学習者の能力に関わらず、流暢性が改善されたことが判った。

終章では、主な成果、理論的示唆、本研究結果による新たな英作文指導のモデルの構築、当該分野の研究への示唆、当該分野への教育への示唆について述べた。

主な成果では、量的分析と質的分析を統合することで、教師によるフィードバックを通して、学習者が、自己効力感、メタ認知を相互に関連させながら、ライティング方略について使用できていることが明らかになり。理論的示唆では、GTMA やケーススタディによる詳細な分析により、フィードバックを通して、学習者が習熟度別にどのような英作文を行ったかについて記述を行った。

本研究の結果による新たな英作文指導のモデルの構築では、並列的トライアングレーションアプローチを用い、量的分析、質的分析を統合した上で、英作文の指導モデルを提案している。「教師のフィードバックによる足場かけと励まし」「教師と生徒間での達成すべき目標や問題点の共有」についてはケーススタディによる分析とし、GTMAにより、「ジャーナルによる振り返り」と「暗示的フィードバックによるライティングの修正」が相互に関連し、「学習者のメタ認知の強化」をさせていることが見て取れた。また、量的分析により、「ライティング方略の見直し」と「自己効力感の向上」について確認をすることができた。

最後に、教育的示唆については、本研究と新たな指導要領との関連について述べた。

新学習指導要領の施行に伴い、教科書等の教材も改訂されている。新課程に準じた教科書を分析した結果、英作文についてアウトプットする機会も多く設けられ、また、学習者同士のペアワークの中で自分の考えを相手に伝えたり、相手の意見をまとめたりするタス

クが増え、学習者同士でフィードバックを行う場面を多く含んでいる事が判った。これらの教材をサポートする上でも、本研究で扱ったフィードバックや学習ジャーナルによる振り返りは効果的であると考えられる。学習者がアウトプットしたものは、教科書の内容だけで完結することは困難であり、第三者からのフィードバックが加えられることで、完成されるものである。フィードバックがあることで、学習者はアウトプットした英文に対してメタ認知を高め、修正をすることが可能である。また、フィードバックにより、学習者がアウトプットしたものが正しいものであるかどうかを確認し、学習者が書いた英文に自信を持たせる、つまり自己効力感を高めるための活動にも成り得る。また、それらの学習プロセスを、学習ジャーナルにより振り返り記録に残すことで、さらにメタ認知を高めることができ、記録を振り返ることで、学習内容に対し自信を深め、自己効力感を向上させることも期待できる。フィードバックの方法論については、生徒対教師だけでなく、生徒同士の学習活動にも応用できる可能性がある。教師からのフィードバックが定着した後、生徒同士に互いにフィードバックをさせることは、さらに学習効果を産む副次的な教科活動として活用が可能であると考えられる。このように、フィードバックを用いることで、新しい教材観の中でも、学習指導要領の改訂事項に則して、学習者の自己効力感やメタ認知を活性化しながら、効果的に学習指導を行うことが可能であると考えられる。

今後、より多くの授業で、様々な習熟度の生徒に対し、より長い期間において実践を重ねることで、更に本研究の成果を発展させていきたいと考えている。また、本研究ではフィードバックが英語教師からであったが、教師からのフィードバックだけでなく、学習者同士が互いの英作文について評価し、話し合うことで、メタ認知や自己効力感を高め、ライティング方略を改善することが求められる。学習者間においても、どのようなフィードバックが、英作文において自己効力感やメタ認知を向上させ、効果的なライティング方略の使用につながるのかについて検討し、フィードバックモデルを模索していきたい。